

## 機織り使った布製品 区内風景デザインしたバッグ…

## 「渋谷みやげ」

## 生み出せ新作

東京五輪・パラリンピックがある2020年に向けて新たな「渋谷みやげ」を作り出そうと、渋谷区と区内のデザイン専門学校、障害者就労施設が連携し、新製品の開発に取り組んでいる。計画開始から約4カ月。学生らが手がけた候補作品が出そろい、選考会が開かれた。



この計画はダイバーシティ（多様性）に関する政策を押し進める渋谷区を土産物で国内外にPRする目的で始まった。渋谷に校舎のある専門学校桑沢デザイン研究所の学生9人が、公募に応じた区内の福祉作業所を訪れ、障害のある人たちと協力しながら土産物の試作品づくりを進めた。

渋谷ヒカリエで先週あった選考会に出展されたのは6作品。セレクトショップ「ビームス」や渋谷を拠点とするものづくりカフェ「FabOgel」などから選考委員を招き、審査した。

「渋谷みやげ」の選考会で説明する桑沢デザイン研究所の学生たち

学生たちは福祉作業所で用いられる機織りを使った

## 五輪向け 区と学生、障害者施設が連携

布製品や3Dプリンターを駆使したボタン、区内の風景をデザインしたバッグなどを提案。選考委員から、想定する販売価格を問われたり、「若さがない。もっと自由に渋谷という素材で遊んでほしい」と要望されたりするなど、厳しい意見も飛び交った。広告会社出身の長谷部健区長も「渋谷らしさを意識して、ストーリーがでてくるような土産物があったらいい」と呼びかけた。

最も高い評価を得たのは、福祉作業所で働く人たちが書いたアルファベットをデータ化し、キーホルダーやピンバッジに採り入れる作品だった。考案した白田翔さん(19)は障害のある人が書く独特な字体にデザイン性を感じたという。「誰でも染しめる物を作った。デザインには自信があったので、今後は消費者視線を考えながら、よりよい物にしていきたい」と話した。

区は選考結果を踏まえ、新年度以降も製品化を目指して販売展開の体制づくりなどを進める予定だ。